

---

# ミラルカ王国物語

四ノ宮朔

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ミラルカ王国物語

### 【Nコード】

N8073F

### 【作者名】

四ノ宮朔

### 【あらすじ】

落ちこぼれの王子。眉目秀麗、騎士としての腕前も国内一の姫。そのほか個性的な面々が多数登場する、笑いあり、涙あり、バトルあり、そしてもちろん恋愛もあり（多分）の王道の百八十度逆を行う非王道ファンタジー…になる予定

## プロローグ

シチリア大陸の中央部。中原と呼ばれるその場所の中心にその国はある。

名をミラルカ王国。「大陸一のぶどう酒」と近隣諸国から言われているほどぶどう酒の製造が盛んな小国だ。

が、特筆すべき点はそれだけで他はごく平凡とした、どこにでもある小国と変わらない。

昔が昔 有名な学者を多く輩出していた なだけに人々から言わせてみれば「酒の造りすぎで酔っ払ったんじゃないですか」、だそう  
だ。

そんな『酔っ払いの国』ミラルカ王国だが、後にその名を大陸中にとどろかせることとなる。

時代は激変の刻。

獅子の紋章を持つ王家はゆっくりとその牙を研ぎ始めるのだった。

## 第一章：獅子の牙 第一話

ミラルカ城城内。

通路に敷かれた赤い絨毯の上を王立魔法騎士隊の鎧を身につけた一人の少女が荒々しい足取りで歩いていく。

その少女は王家の紋章が刻まれた髪飾りをしており、それは同時に少女がミラルカ王家の血筋ということを表していた。

「まったく！あの兄上には困ったものだ！」

何か気に入らないことでもあったのか、憤然とした表情で愚痴をこぼす少女の名はリア・フェリオルという。

細く柔らかなその黄金の髪や美麗なその容姿からは確かに王家のものを持つ特有の高貴さが伺えた。

「お、お待ちくださいリア様！」

声に振り返るとリアのよく見知った給仕係の少女が慌てた様子で駆けってくるのが見えた。

「どうしたメイ？」

「こ、国王様が会議に戻られるようにと」

「兄上があんな調子では戻る気にもならないな」

「リ、リア様〜」

メイと呼ばれた少女は息を切らしながらそんなこと言わないでくださいよ、と言わんばかりにリアに泣きついた。

「戻ってくれないと国王様に怒られちゃいます〜」

「ああ、もう…！分かったから離れる！」

「ふええ…」

泣きながら離れるメイの頭をよしよしと撫でてやるリア。

その姿には給仕と使えられるもの以上の親密さがあった。

「その…お前に泣かれると困る」

「すみません…」

「い、いやっ！謝らなくてもいい！」

またふええ、となりかけたメイを見てリアは思わずどもる。

ミラルカ王家の姫として、また国内で無敵と称される女騎士として国民的指示を集めているリアもメイの涙には弱い。

「…戻るぞ、メイ」

「…！は、はい…」

会議室へと向かうためにきびすを返した自分の後ろを慌ててついてくるメイを見て、最初からこうすればよかったな、と苦笑するリアだった。

## 第一章：第二話

コンコンと会議室の扉がノックされた音を、シルファ・フェリオルは目を瞑ったまま聞いていた。

ノック後すぐに扉が開いたらしく足音が二つ会議室の中に入ってくるのが分かったが、シルファは我関せずといった表情で目を開けようともしない。

「国王様、ただいま戻りました」

「うむ、ご苦労じゃった」

若い給仕 確かりアの世話係だったか の声がし、国王がねぎらいの言葉を掛けたとすればおそらくリアは戻っているのだろう。

これではなおさら目を開けることはできないなとシルファが考えていたとき、

「兄上！」

会議室に凜とした、それでいてよく通る声が響いた。

思わずシルファが目を開けて正面を見るとリアが顔を赤く染め、肩を大きく震わせていた。

「あわわわっ…り、リア様国王陛下の前ですよー」

隣でメイが慌てているのも気にせずリアは、

「兄上！今がどういう時期か分かっての居眠りか！？」

と、今にも腰に携えた剣を引き抜かんばかりの勢いである。

シルファはどうすればいいものかと国王、つまり父のほうを向き助けを求めたのだが、「自分で何とかしろ」と口パクで伝えてくるだけで何の解決にも至らなかった。

「聞いているのですか兄上！」

「……」

「兄上！」

「……リア、少し落ち着きなさい」

さすがに見るに耐えかねたのか、それとも父としての気持ち勝ち勝ったのか国王はリアをたしなめとりあえずは場は収まった。

（ふうー…修羅場だね）

これまで自分の態度に腹を立ててリアが部屋から出て行くことはあったが、今日みたいに怒鳴ってくることはなかった。

それだけ事態が急を要することなのだろう、と自分が原因であることなど棚に挙げ、シルファは物思いに耽っていた。

## 第一章・第三話（前書き）

なれない三人称での執筆なので変なところがあれば言ってもらえる  
と助かります；

あ、感想なども大歓迎ですよ^^

## 第一章：第三話

シチリア大陸には三つの大国がある。

北のベルン皇国、南のフレイア帝国、西のレトリア王国。

いずれも大戦前から栄えていた大国だ。

だが、東の大国だけは、大戦で滅びたとされている。

されている、という言い方なのは、その大戦自体が1500年も前のものであるため裏づけが取れないのだ。

今ではその場所は魔族たちの住処となり、人間と魔族の間では盛んな交流が続けられている。

大戦以後2回ほど大きな争いがあったが、ここ数百年は大陸の諸国は平和を謳歌していた。

しかし突如としてその平和はレトリア王国の崩壊という形で崩れ始めた。

レトリア王国亡き後の西部の覇権争いのためベルン、フレイア両国の水面下での争いは中原までをも巻き込もうとしていたのであった。

以上のことからこれからどういつぶつに政治を進めていくか議論するための会議だったのだが、あまりにもやる気の見えないシルファにリアが激怒したため会議は一時中断。

再び始まった会議でも具体的な政策は決まらず、その日の会議は終了となった。

「王子」

「ん？」

会議が終わり、自室へと戻ろうとしているとき。

背後から聞こえてきた声にシルファが振り向くとそこに190cm近い上背の男性が立っていた。

「やあ、宰相ハーレンさんがダメ王子に何のようですか？」

「王子…あまり自分を悪く言うのは感心しませんよ」

宰相ハーレン。この男こそがミラルカ王国の執政担当であり国王の右腕でもある。

ハーレンの外交能力は中原、いや大陸でもそうはいないほど長けているのだが、いかんせん国のイメージが低いので他国からあまり評価されていない。

「実際そうなんだけど…。ところで、どんなようなの？」

「えっと…ここではなんですから私の部屋に来てもらえませんか？」

「ええーめんど…や、行かせてもらいます」

ハーレンの笑顔の下になにを見たのか、冷や汗をかきながらシルフアは頷いた。

## 第一章：第四話

「おおーすげー！いろいろあるんだなこの部屋！」

「あんまり人の部屋を物色しないでもらえます？」

本棚の本を物色しながら目を輝かせるシルファにハーレンが呆れ顔で言った。

「はい、どうぞ」

ハーレンがカップに淹れた紅茶を二つテーブルまで持ってきて置く。

香りからでも高級と分かるそれは綺麗な水色をしていた。

「ダーズリン・ティーです。マスカテルフレーバーという強い甘い香りが特徴で、その良し悪しが茶葉の価値を決めるんですよ。ちなみにこの茶葉は大陸で一番良いものになります」

「紅茶なんてどれも大して変わらないと思ってたけど、確かにこの紅茶はぜんぜん違うな」

「でしよう？紅茶はパックでいいなんていうのは冒涇です」

装飾されたアンティーク基調の室内でお互いのんびりと向かい合って話す時間も悪くないな、とシルファは思った。

それほどにその紅茶はおいしく、ハーレンが紅茶好きなのも頷ける。

「で、ハーレンはわざわざ僕と紅茶を飲むためだけに部屋に案内したのかい？」

「…」  
「冗談を」

今までゆったりと流れていた時間が、空気が変わった。

両者の間にあるのは緊張感のみ。

そこに馴れ合いの雰囲気はなく、これから起こる展開が重要なことを物語っている。

「…失われたはずの秘宝」

「ッ！」

言った瞬間、シルファの顔色が変わったのをハーレンは見逃さなかった。

「そこまで露骨に反応してくれると拍子抜けですね」

「あまり知られてないはずなんだけどな」

「これでも宰相ですので」

えげつない宰相もいたもんだ、とシルファは唇を尖らし愚痴をこぼす。

“ミッシング・ゼロ”

存在自体がタブーになっているそれは大戦以前の文明、すなわち旧文明の遺産だ。

それがもたらす所業は、奇跡と呼ぶのにふさわしい。

メイジが使う魔法も、その前ではかすんで見えるほどに。

一説によれば大戦での文明の崩壊はミッシング・ゼロの影響ではないかといわれている。

それ一つで歴史を変えられるほどの力を持った物質。

それがミッシング・ゼロなのだ。

「所在は分かっているんですか？」

「レトリアに二つあった。今はどうだか…おおかた北と南に取られたんじゃないの？」

「でしょうね。後の三つは？」

「一つはここ。後の二つは…わかんない」

なるほど、とハーレンは小さく呟きため息をついた。

シルファから聞いた情報と自分が入手した情報はほとんど同じだった。

もしかすると彼なら何か、と思ってハーレンは聞いてみたのだが何の進展にもならなかった。

「でも、一つ確証はある」

「…といつと？」

「レトリアの崩壊はミッシング・ゼロの使用だ」

およそ冗談とも取れる発言だが、シルファの両目は戯言を言っているようには見えなかった。

「荒れますね…此度の戦は」

「荒れるどころか…また文明を崩壊させる気なのか？」

正気じゃないですね、と嘆息したハーレンはいつの間にか冷めていた紅茶を一気に飲み干した。

「そろそろ動き出さないと…手遅れになりますよ？」

立ち上がり、ドアへと向かうシルファの背中に声をかける。

「…何のことだ？」

「そうやって、いつまで道化<sup>バカ</sup>を演じているつもりですか？」

その問いには答えず、シルファはただ黙って扉を開けた。

だから、

扉を閉める直前に聞こえた声をハーレンは危うく聞き逃しかけた。

獅子は牙をもう、ゆっくりと研ぎ始めてるよ

ボタンと扉が閉まる。

「楽しみにしてますよ、シル」

ハーレンの顔にはまるで獅子の覚醒を待っていたかのような、無邪気な笑顔があった。

## 第一章：第四話（後書き）

さて、ダメ王子の真の姿が見え隠れしましたね^^

前回、今回と出番のなかったリアですが次回は出します！…多分

さて、筆者明日から四日間旅行に出かけるので更新できるか分かりません；

なので、更新を楽しみにしていらっしゃる方（いるか分かりませんが；）はすみません；

帰ってきたらしっかりと書きますので！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8073f/>

---

ミラルカ王国物語

2010年10月10日05時12分発行